



老施協
VISION 2035



公益社団法人
全国老人福祉施設協議会
広報誌

老施協

MONTHLY

特集

地域共生社会の社会福祉法人



わたしたちの今日・明日・未来

全国施設最前線365

地域のなかで生きる施設へ。

“出ていく”軽費老人ホームの挑戦

09



「二度とない出会いを大切に、この出会いという宝物を感謝と尊敬の心で受け止め、常に思いやりと愛の心を持っておもてなしをすること」を理念に1986年に法人設立。現在、愛知県内の大口、岩倉、阿久比の各エリアで4つの施設を運営。今回訪ねた大口地区には、軽費老人ホームをはじめ、デイサービスセンター、ケアプランセンターがある

- 愛知県丹羽郡大口町大屋敷3-207 ●tel.0587-95-3118
- 入居定員：50名（軽費老人ホーム）、25名（デイサービス）
- <https://www.ichigoichie.or.jp/ooguchi>

施設紹介

愛知県

社会福祉法人 一期一会福祉会
軽費老人ホーム 一期一会荘

第18回

わたしたちの
今日・明日・未来

最前線 365
サン
ロク
ゴ



こちらにお話をうかがいました



鈴木 信義さん

大学で社会福祉を学び、一期一会福祉会へ。特養の生活相談員、荘長を経て、一期一会荘の荘長に就任。ライフワークは演劇で、認知症サポーター養成講座ではオリジナル脚本による創作劇『そうだね、おばあちゃん』を小学生向けに上演。自身が85歳の認知症のおばあちゃんに扮し、認知症患者への理解をわかりやすく促す

好きな言葉は

笑う門には
福来る

どんな状況でも笑顔を忘れなければ、
希望が宿ると思っています



コロナ禍以前は毎年開催されていた納涼祭に代わって、2023年秋、はじめて開催された一期一会荘の「仲間ルシェ」。普段なかなか外出できないご入居者も買い物を楽しんだ

地域のなかで生きる施設へ。“出ていく”軽費老人ホームの挑戦



① アウトリーチ活動にはご入居者も参加。写真は、通学路で小学生の見守り活動を行うご入居者。児童との挨拶が毎日の習慣になっている ② 「仲間ルシェ」では自分たちの作品を来場者に直接販売。それがご入居者の達成感につながった ③ 荘長・鈴木さんを囲む職員の皆さん。かぶり物で場を和ませる明るさに、風通しのよい職場風土がにじむ ④ 地元のよさこいチームもマルシェに出演。3チーム総勢80名による迫力ある演舞が会場をおおいに盛り上げた

知ってもらうために、
もっと自分たちから動こう

社会福祉法人一期一会福祉会が運営する軽費老人ホーム一期一会福祉会、昨年の「第3回JSフェスティバル」の実践研究発表において、「地域とつながるアウトリーチ活動」というテーマでの発表で優秀賞を受賞しました。ここでいうアウトリーチとは、施設がもつ人とのつながりや地域資源を活かし、地域に貢献する活動のこと。能動的な発想への背景には、コロナ禍で断たれた地域とのつながりを取り戻したいという、職員の切実な思いがありました。加えて、地域に十分知られていない軽費老人ホームへの認知を高めたいという願いもあったと、荘長の鈴木信義さんは話します。

状況を打開すべく、コロナ禍明けに町の長寿ふくし課に足を運んだ生活相談員の廣江直樹さんは、「今まで施設に閉じこもっていた分、今後は自分たちから地域に出て住民とのつながりをつくってほしい」との気持ちを強めていきます。施設の催事としてマルシェを開催するというアイデアもその頃に生まれ、地域との新しいつながり方を模索する動きが加速していきました。

すぐそばにあった地域資源を
つなげて、活かして

「自分たちで何ができるかを探ったら、つながりの芽は身近にたくさんありました」と廣江さん。施設内の行事委員会を起点に職員全員でアイデアを出し合いながら地域の人脈をたどるなかで、地区の体操教室と一緒に開催した地域企業と関係が築かれ、地元のよさこいチームには職員の家族が所属していることも判明しました。こうした縁をたぐり寄せながら職員全員で準備を重ね、2023年秋、施設の敷地を会場に、「仲間ルシェ」と銘打った第1回マルシェの開催に漕ぎ着けました。

主任介護職員の小林江里さんいわく、「これまで行っていた納涼祭は、職員がご入居者をもてなしていました。が、仲間ルシェでは職員とご入居者が一緒になって地域住民をもてなします。その準備をするなかで、ご入居者がどんどん前向きになられたのが印象的でした。仲間ルシェ当日には『私が看板娘になるから店番は任せて』と申し出た方もいたと、催事がもたらした変化を振り返ります。

優秀賞受賞
誌上プレゼンテーション



「地域とつながるアウトリーチ活動」

コロナ禍で地域との交流が断たれるなか、一期一会荘は“もとに戻す”のではなく
“新たにつくる”という視点で、地域貢献や軽費老人ホームとしての役割を再定義。
地域のなかに自ら出向き、多様なつながりを生む「アウトリーチ活動」に取り組んでいます。

31年続いた夏まつりも全て、地域との交流が消える



元に戻すではなく **新たな取り組み**を

軽費老人ホーム
としての役割

地域貢献

能動的

アウトリーチ活動

《 原点 》 能動的に地域へ

合い言葉は“能動的に動く”。軽費老人ホームとしての役割を見つめ直し、福祉のプロとして地域貢献を行うために、一期一会荘では新たな取り組みとして3つのポイントを掲げました。これらの取り組みを踏まえて生まれたのが、一期一会荘の「アウトリーチ活動」です

アウトリーチ活動

一期一会荘 × 大口町長寿ふくし課

地区での
体操教室

高齢者
教室
(さくら大学)

登下校の
見守り

花見客へ
の出店



《 連携 》 日常に入り込む

アウトリーチ活動は、施設がある大口町長寿ふくし課と連携して展開しています。地域の集会所や老人クラブの高齢者教室での介護予防体操、ご入居者が行う小学生の登下校の見守りなど、職員とご入居者が一緒になり、地域の日常に寄り添う形で活動を続けています

アウトリーチ活動

マルシェ

さらなる地域貢献・交流の場の創出 **マルシェ**を開催

マルシェ：フランス語で市場や朝市という意味

マルシェを始めるにあたり…

1. 人とのつながりや地域資源の洗い出し

以前働いていた 職員	職員の 知り合い	地区体操教室 での出会い	福祉用具 業者	飲料水 メーカー
入居者の 就労所	近所の米屋	地元高校の 吹奏楽部	よさこい	警察・消防

再発見

地域や人とたくさんつながりがあった



《 拡大 》

人の縁をつなぐ

活動するなかで実感したのが、人との縁の広がりです。こうしたご縁を紡ぎ、施設独自の「仲間ルシェ(マルシェ)」を開催しました。この催事をさらに盛り上げるために、地元高校の吹奏楽部や、よさこいチームなどに出演してもらい、警察や消防署に車両展示をお願いしました

《 実感 》

笑顔が広がる場

施設の敷地で開催した「仲間ルシェ」では、買い物や出店を通して、ご入居者が地域の一員として役割を果たす時間もありました。3チーム総勢80名による迫力あるよさこいチームの演舞や、地域の子どもたちとのふれあいなどに、ご入居者の笑顔が広がりました

考察 まとめ

未 来 の
軽 費 老 人 ホ ー ム の
役 割 と は

社会資源の
可視化

関係機関への
PR活動

職員と入居者で
地域をもてなす！

地域とつながる
～アウトリーチ活動～

《 展望 》

新しい福祉の姿の追求

施設は多くのつながりに支えられています。そうした社会資源を可視化し活用するには、自治体との連携は必須です。また、職員とご入居者がともに地域をもてなすという視点をもつことが、ご入居者の残存機能の活用や社会性の再獲得にもつながると確信しています

【 総括 と 展望 】

発表のポイント

Why

なぜ始めたか

コロナ禍、31年間続けてきた納涼祭や地域交流が一気に失われ、ご入居者も職員も孤立感を深めていた。もう一度地域とつながるには何ができるか。そうした模索のなかから、アウトリーチ活動が生まれた。



How

どう進めたか

自治体や地域団体とのつながりを一から見直し、ご入居者や職員の人脈も頼りに活動の輪を広げていった。施設の外に出向くことを大切に、声をかけ合える関係づくりを丁寧に進めた。



What

何が起きたか

ご入居者の変化が大きな成果だった。活動への参加を通じて自信や意欲が高まり、日常にも能動性が見られるようになった。ご入居者にもアウトリーチ活動に参加してもらうという視点から始めた、小学生の登下校見守り活動では、児童との挨拶を交わす姿が見られるようになり、その笑顔の交流が、ご入居者のこころとからだの活性化につながっている。

発表で伝えきれなかったこと

地域の自治組織を定期的に訪ね、広報誌を届けながら関係を築くなかで、地域との新たなつながりも生まれた。地元企業との接点も、紹介を通じて実現。関係を一過性で終わらせず、継続して訪問しアイデアを持ち寄ることで、地域に根づいた活動へと発展している。



ボランティアで「仲間ルシェ」に協力してくれる地域の消防署の皆さん

発表後のさらなる取り組み

地域イベントへの出店や見守り活動、高齢者教室での講演や体操指導など、現在もアウトリーチ活動は継続中。夏場にクーリングシェルターとして施設の開放も始めた。今後は、町主催の高齢者向け講座開催の際、指定の巡回バスへの乗車が困難な高齢者は職員のサポートのもと、施設のマイクロバスに乗りしてもらう取り組みなど、施設の資源を地域に還元する試みもスタートする予定。



地域の集会所で実施した介護予防体操。アクティブシニアから要支援の方まで、幅広い世代の方々が集まった

■ 一期一会荘 生活相談員 廣江 直樹 さん



2001年、一期一会福祉会へ。特養やデイサービスセンター、グループホームでの介護職、生活相談員などを経て現在に至る。高齢者福祉での豊富な職務経験を活かし、今はアウトリーチ活動の実務を中心的に担い、行政や地域との連携のハブ役を務める

■ 一期一会荘 主任介護職員 小林 江里 さん



2009年、一期一会福祉会へ。以後、介護職員として勤務。現在は主任介護職員としてチームをまとめながら、ご入居者と地域とのつながりづくりに積極的に関わる。「仲間ルシェ」などのイベントでは、ご入居者が輝ける場づくりに力を注いでいる



好きな言葉
「ありがとう」と「探究心」
まわりの人に感謝の気持ちをもち「入居者に喜んでもらうにはどうすればいいかを、常に考えるように意識しています」

好きな言葉
「一期一会」
毎日朝礼で声に出して言ううちに、いい言葉だなというしか私の人生の指針になりました

荘長の鈴木さん、主任介護職の小林さんとともに、やさしいポーズを決める廣江さん(左端)。自由闊達な職場環境が一期一会荘の魅力

アウトリーチ活動の仕掛け人であり、実行部隊でもある生活相談員の廣江直樹さん。地域に出ていく施設の姿を模索するなかで、行政や地域住民との関係づくりに地道に取り組んできました。廣江さんが感じているやりがいや、これからの思いに迫ります。

「やってみよう」が、 職員の背中を押す

アウトリーチ活動が始まったのは、施設全体で地域と関わっていきこうという目標を荘長が掲げたことがきっかけでした。

「現場にそれが浸透するには時間がかかることもありますが、一期一会荘には職員のやる気を後押しするような空気がありました」と廣江さん。

「こういう企画をやりたい」と提案すると「じゃあ、やってみて」と応えてくれる。そんな組織風土のもと、職員が自発的に動く雰囲気になったと話します。

また、法人の広報誌(季刊発行)が刷り上がるたびに、それを手に地域を回ることも活動の一部に。継続的に顔を出し、状況を報告することで覚えてもらえるようになり、これまでになかったつながりも生まれました。こうした地域への広がりは、ご入居者にも変化をもたらしています。

「仲間ルシェの写真をLINEで送りたいから操作方法を教えてください」と聞かれることもあり、楽しまれているのが伝わってきます」

顔を覚えてもらう 喜びが力に

そうした変化のなか、廣江さん自身のやりがいも育まれていったといいます。

「活動を続けるうちに、だんだんと町の方に顔を覚えてもらえるようになりました。一期一会荘のある大口町には町民向けの生涯学習講座があるのですが、地域の広報誌などに私の名前が講師名で出ていると、『廣江さんが出るから来たよ』と声をかけられたりします。そうしたことも、私にとって大きな喜びになっていますね」

こうして築かれた顔の見える関係は施設への信頼につながり、軽費老人ホームという場の認知向上にも奏功しています。また、活動が続けるなかで地元企業とつながる機会も生まれ、仲間ルシェや地域行事への出店・協賛など、活動の幅を広げる力にもなっているのだそう。

「町の長寿ふくし課から直接、講師の依頼が来たり、自治組織と一緒に地域行事を企画したり。求められていると実感できるのは本当にうれしいことです。今後は子ども連れの来場を促す工夫や、来場者と出店者の好循環を意識した仕掛けを考えながら継続を図ります」

地域とともに歩んできたという実感が、廣江さんの日々の原動力になっているのです。